小松左京

旅する女

旅する女

小松左京

河出書房新社

旅する女

昭和四十八年八月十日　初版印刷
昭和四十八年八月二十日　初版発行

著者　小松左京
装幀者　丹阿弥丹波子
発行者　中島隆之
発行所　株式会社　河出書房新社・東京都千代田区神田小川町三ノ六
電話東京(〇三)二九二一—三七一一・振替東京一〇八〇二
印刷所　中央精版印刷株式会社
製本所　中央精版印刷株式会社

©1973

600円

0093-037341-0961

レ

目次

秋の女　五
旅する女　五七
歌う女　一一九
黄色い泉　一七七
握りめし　二〇七

J・M氏に。感謝をこめて。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

旅する女

秋の女

一

所用で山陰をまわって、山口へ出た時、湯田温泉の古い旅館の一室で、ふと下関まで足をのばして、お咲さんの顔を見たくなった。

用といっても気楽な旅で、さる旅行社の依頼をうけて、秋の山陰をまわり、パンフレットに軽い印象記をまとめる、といった簡単な仕事だった。

京都をふり出しに、城崎、鳥取、米子ととまり歩いて、松江、出雲で、一応のうちどめになり、このあと忙しければ飛行機で帰阪、もし時間があるなら、石見大田、浜田、益田をまわって、萩、長門あたりまで、足と筆をのばしていただければ幸甚、という事だったが、松江で二日滞在するうちに、必要な原稿はできてしまい、東京の本社と電話でうちあわせをして、一緒について来た編集部の若い人は、それを持って、一足先に飛行機でかえる事になった。

もし、それから先の旅について書くにしても、二回連載にして、来月まわしという事で、私としては大変ありがたかった。——今度の旅で一応二週間の予定をおさえており、そのあとも、さしあたり

これといって、さしせまった用はなかったから、出雲から先は、仕事の連れとはなれて、ゆっくり旅をたのしむ事ができる。それに山陰の石見海岸といえば、旧友の郷里がその地方にあって、昔から何度か訪れていたので、さほど気ばってあちこち見歩かなくても、最近の変化を車窓に見ながらざっと通りすぎるだけで、短い原稿ぐらい書ける自信があった。

朝、出雲を出る時は、萩へまわるつもりだった。——が、早くも冬の気配を思わせる重苦しい灰色の雲の下に、鉛色の日本海がはてしなくひろがり、黒ずんだ岩が白い波を嚙む石見海岸の光景を車窓に見つづけるうちに、ふと心が重くふたがる思いがして、民家の、石見瓦の乾いた赤を見ると急に山陽へまわりたくなった。思えば京都を出てから一週間ちかく、すでに晩秋といっていい、十一月はじめの山陰を旅しつづけて来たのだ。山陰の名の通り、秋の日のうつろいは、明るい瀬戸内にくらべて一きわ早く、思いかえせばいつも赤い夕映えに照らされる丈高い稲かけや、山肌の光景ばかりがうかぶ。松葉蟹は解禁になっていたが、まだ身の入り方は本格的でなかった。山陰は、秋より雪深い冬がいい……。

そんな事を考えているうちに、益田でのりかえて、山口へ出たくなり、車掌をつかまえて山口線のダイヤをきき、行先変更を申し入れた。——益田から、山口へ行く途中には、あの静かな盆地の中の眠ったような城下町、津和野がある。おりて一泊、とも考えたが、なまこ塀とつわぶきと、町中の溝にゆったり泳ぐ鯉で有名な津和野の秋は、数年前、石見の友人と訪れて見た事がある。今回は、少々車中の時間がかかるが、一気に山口までのして、そこで二日ほど滞在と心にきめたのは、この機会に、秋の山口をゆっくりと見たい、と思ったからである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山口には以前、二度ばかり、慌しい日程でたずねている。――一度は梅雨時の、雨のじとつく日で、一夜、名物の源氏螢のとびかうのは見たものの、翌朝は雨の中を早立ちで、観光どころのさわぎではなかった。二度目は八月半ばの炎暑のさ中で、風の動かぬ中でもえ上るような緑の木立とあつくるしい蟬しぐれに、舌を吐く思いだった。小京都といわれるだけあって、盆地の中のこの都市は、夏暑く、冬寒い。秋がよろしいけえ、秋に来んさい、といわれた事が、頭の隅にこびりついていた。

山口の駅におりたって、市街地つづきの湯田温泉に電話すると、幸い心おぼえの一軒に空き部屋があった。――七卿落ちの碑で有名なMという古い宿屋である。その日はどうという事なく、湯にのんびりつかって日が暮れ、ふぐ刺で一杯やった。近年、内海のふぐは、博多玄界のそれにくらべて、どういうわけか味がおちたように思える。といって、やはりふぐはふぐだ。十一月の上旬、山陰の蟹はまだ早いが、ふぐはそろそろ食べごろである。が――何も、ふぐから下関へ行く事を思いたったわけではない。最初にいったようにお咲さんの事を思い出したからである。

一泊して翌日、清涼の秋日和を朝から出かけ、常栄寺の雪舟庭も、瑠璃光寺の五重塔も、心ゆくまで鑑賞できた。――山口を知る友人は、この町を、「ざっと見るつもりならとりとめのない街」といったが、晩秋にさしかかる一日を、ゆっくりかみしめるように味わえば、国道九号線の往還もあってややほこりっぽい街路のむこうに、十四世紀から十六世紀へかけての大内氏二百年の栄華の姿が、次第にうかび上ってくるような気がする。

大内氏は、筋目正しい守護大名として、中国筋西部を中心に、近畿の紀、泉、九州豊前をも領した大勢力だが、百済王聖明の裔と称するだけあって、大陸、特に朝鮮との関係が深く、当時朝鮮が日本

に対して制限をおこなった貿易も、大内氏に対しては特別に無制限だったという。弘世が京都を模して山口を造営して、「西の京」とよばれ応仁の乱で京から公卿、文人多数が移住し、対明、朝鮮貿易で最盛期明人二千を数え、その繁栄は一時期京都をしのいだ、といわれるこの都市の往時は、今では市内処々にのこる社寺、庭園のそこここにしのぶしかないのだが――それでも、大内氏のはからいで明にわたり、ついに本邦山水画を完成した雪舟のつくったという常栄寺庭の石組みのたたずまいや、紅葉を背景に、すみわたる秋空にそびえる瑠璃光寺の国宝五重塔の、息をのむような優雅荘重な姿は、奈良、京都の、幾重にも厚く国内にこもった中のそれらとちがって、その閑寂な石の配置の中にあるどこか日本ばなれのした力強さ、その宝輪水煙のつきさす空の乾いた青さの中に、はるかな半島、大陸の、広い、開かれた空間とじかに呼びあい、ひびきあうものを持っている感じだった。

昼餉は外ですませて、午後早く、休憩のために、私は一たん宿へかえった。――ほてった足を、縁先からおろして庭下駄の上におき、少々興奮を感じながら、やわらかい秋の日ざしをあびていると、女中さんが土地の銘菓「舌鼓」といっしょに茶をたててはこんで来た。

座敷に上って、茶碗を手にとると、これが山口の事とて言うまでもなく、萩焼だった。――鮮やかな黄緑の泡をゆっくりと味わい、おいしさのあまり、もう一服、今度は少し大服に注文し、さて二杯目を一口吸って、庭をながめると、いま、この十一月初旬のあたたかい晴れた午後、山口にいて、大きな古い旅館の、深い庭を前にして、萩焼の茶碗で茶を喫している幸福が、しみじみとあたたかく胸にのぼってくるようだった。――旅館そのものは、車の往還のかなりはげしい表通りに面しているが、土塀が高く、建物そのものは広大な庭を前にして、奥深くひきこんでいるから、騒音はほとんど

きこえない。庭は周りに亭々たる大樹をめぐらし、一方に大きな築山があり、さりげなく手入れの行きとどいた植えこみと岩組みが、深みのある陰影を形づくっている。よくついた苔と、小ぶりな玉砂利を敷きつめた間を、遠州風の幾何学的な飛石がぬい、中央にはこれもまわりを自然石でくんだ、大ぶりな池がうねっている。石橋のあたりの眺めは、桂離宮の湘南亭のそれをふと思わせるものがあったが、あれほど閑寂にこもったものでなく、全体として、からりと明るい、しかもどっしりとした感じだった。池の濁った水の中には、さすが長州の事とて、尺余、二尺もの緋鯉、真鯉、まだら鯉が群れをなして悠々と泳いでいる。中に何尾か見事な錦鯉もまじり、時価何十万としそうな、尺五寸をこえる金兜が二尾、対になって、池面にそそぐ陽光に全身を金色にかがやかせながら泳ぐさまは、息がとまりそうに見事だった。

その庭に、親子の三毛猫がいた。

あたたまった庭石の上に、大小二匹のうのうと寝て、時に子が親にじゃれたり、思い出したように乳房にむしゃぶりつくのを母猫がかかえこんでていねいになめてやったり、かと思うと腹を上にして背中を岩にこすりつけたり――その二匹の上に、麦藁色のやわらかい秋の日ざしがさんさんとふりそそぎ、その同じ日ざしが、南むきの縁側に、ななめに深くさしこんでいるのが、いかにも山陽の秋らしく、あたたかな感じだった。

そういった光景をながめながら、ゆっくり茶をすっていると、萩焼のやわらかい色と手ざわりが、何ともいえずいとおしくなってくるのだった。

――阪神間に生れ育った身としては、それまで、萩焼にあまり関心を持たなかった。もともと焼物

に趣味のある方ではない。それも素人にどがつく程度で、手前勝手な好ききらいがあるばかりだが、茶器といえば、やはり楽焼の系統に馴染みが深く、若いころには、織部などが雄渾に思えて、伊賀、志野など、荒々しい、時には八方破れのものを珍重する気持だったが、四十ちかくなって、九谷をとびこして、突然繊細華美な、京焼絵付などが好きになったりした。すぐお隣の備前焼が、あまり好きでなかったためか、西の焼物には薩摩も萩もほとんど関心をはらわず、伊万里、有田の系統でもどうせ名物なぞ入手できないのだから、見るだけならいっそ一思いにとんで、正真景徳鎮ものの呉祥瑞や、古渡り宋胡録をと、展覧会の目録であさってきた。

が、いまこうして、山陽も西のはずれにちかい山口の秋の日に、奥深いが明るい庭園を前にして茶を喫していると、これまで折にふれて見かけながら気にもとめなかった萩焼が、まことにこの地の風土、陽ざしにふさわしいものに思えてくる。——当時日本の最高最大の貿易自由都市堺の商家に出て、舶載唐物など「ほんもの」をいやというほど見ていたにちがいない千利休が、数千年の歴史を持つ大文明国中国の、形式内実ともに途方もない「蓄積と完成度をもつ美」に追随競合する事に真底絶望し、身辺庶民の用器や、アマチュア文人手づくりの陶器を使った侘茶の形式をたてて「これぞ日本独自の美」としたのは、一種絶望的な居なおりであったろうが、しかし当時中国と日本の両方が見えていた彼のこの綱渡り的エスプリは、鎖国する次代にはもう見失われ、そのかわり茶の湯は、たしかに日本独自の「大衆的たのしみ」になった。——そして、そこに出てくるのは、階級文化や、地方性ではなかろうか？

遠州流の茶室に織部の茶器は、いかにも関西より東国の、「江戸武家」にふさわしい。——関西の

茶室になじんだものには、関東のそれは時折びっくりさせられる事があるが、それは土の色が黒いばかりでなく、庭全体が、関西のそれよりもずっと、青黒い――時には育ちすぎた暗い木賊色の感じがする事があるからである。前栽に、黄緑がすくなく、苔の色も暗緑が勝つ。武蔵野の風情をとりいれたものもあったが、それはそれであまりに荒涼として、山家を思わせた。このような土地でこそ、織部の土臭と力強さが生きる。ならば京、大阪の茶会は、すがれて楽焼、はなやげば、赤地に金の細密画を配した京焼などがあうのではなかろうか？

だが、土の色は赤白の明るみをおび、山の木さえ、春夏は黄緑、秋は鮮明な紅黄にかがやき、海をうけ、空はあくまで乾いて青く、なにもかも明るいここ山口にあっては、萩焼の明るさ、やわらかさこそふさわしいものに思えた。

地は卵色であろうか、それともすこしは赤味をおびているのか、いずれにしても軟陶のやさしい手ざわりが、掌の中で、茶をみたした内側から人肌にあたたまるのがなつかしく、ぬるむのもかまわず、掌にその感触をたのしんでは庭を見、日ざしを見、猫の親子と鯉を見て、最後の一口を、惜しむようにゆすり上げてすすった。――何の変哲も、ひねりもなく、ただまろく、茶碗型につくり上げ、口造りもすなおに薄まっている。やや灰色をおびた乳白色の釉薬が、なめらかに、砂糖の衣のようにかかり、かなりつかいこんだと見えて、中をのぞくとその乳白の底から、ほんのりと赤味がうき出しかけている。

それを見ていると、突然、下関にいるはずの、お咲さんにあいたくなってきた。――その萩焼の茶碗の、まろさ、あたたかさ、やさしさ、明るさ、そして乳白色の釉薬の底からはじらうようにうかぶ

ほのかな赤味が、お咲さんの事を思い出させたのである。

二

翌日の午前中、小郡で山陽線の下りをつかまえる前に、亀山公園のサビエル記念聖堂だけを見ておこう、と思って、宿からタクシーでそちらへまわった。——小郡まで大した距離ではないので、そのまま車でむかうつもりだった。

公園の濃い緑をつらぬいて、二本の四角い尖塔がそびえる聖堂は、清楚で明るい感じだった。そんな聖堂を見、亀山公園を一まわりして、また聖堂の前にかえってくると、ちょうど中から、二人の女性が出てくるのが見えた。——一人は、ベネディクト派の修道服を着たほっそりとした修道尼、もう一人は、錆朱より、もっと深みのある、若干マルーンがかった色合いの塩沢かなんかをきりりと着こなし、塩瀬らしい帯をしめた小柄な中年女性で、手に松葉色のコートを持ち、尼僧に何か話しかけながら、聖堂の方を何度もふりかえっていた。

そのとりあわせが、何となく不思議な感じがしただけで、あとは別に何の関心もなかった。——和服の女性は、家庭の主婦というよりも、着こなしや髪形など、ずっと垢ぬけしている感じで、玄人とまでは行かないまでも、お茶か踊りか、何か稽古事で弟子もとっている、師匠格の人と思えた。色白中高の顔に、眼の輝きがなぜか尋常でなく、すれちがうコースを歩きながら、その大きな眼と、視線があう事を反射的におそれながら、聖堂の尖塔を見上げるふりをしつつ、間隔をつめて行った。だが、こちらの顔にあたっている視線は、どうやら尼僧のものらしかった。と思ったとたん……、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com